Sāttvika-bhāva の問題

上　村　勝　彦

バラタは8種の sāttvika-bhāva をあげる[1]。1. 硬直 (stambha), 2. 汗 (sveda), 3. 立毛 (romāñca), 4. 声のとぎれ (svarabhaṅga あるいは -bheda), 5. 震え (vepathu), 6. 顔色の変ること (vaivarṇya), 7. 涙 (aśru), 8. 失神 (pralaya)。そして，それを49の bhāva のうちに含める。bhāva は一般に「感情」と訳されるが，硬直，汗などの身体的な状態がどうして bhāva とみなされるのであろうか？

sāttvika とは sattva より生ずるという意である。バラタは sattva を定義して次のように述べる[2]。

「ここで sattva は心に生ずるものである。そして，それは心を一つの対象に集中した状態 (samāhita-manastva) から生ずる[3]。心を統一すること (samādhi) において sattva が生起するのである。(中略) そこ (i. e. 演劇) では，苦という泣くことを性とするものが，どうして苦しんでいない者によつて演じられるか。また，楽という歓びを性とするものが，どうして楽しんでいない者に演じられるか。苦しんでいる者と楽しんでいる者とによつて〔のみ〕涙と硬直とが演じられ得るのであるからこそ，彼 (役者) に sattva が〔必要とされる〕のである。だから〔涙や硬直は〕sāttvika bhāva と呼ばれるのである。」

バラタは役者が sattva を有すべきことを要求する。そして，sāttvika は役者の身体に表われた特徴である[4]。sattva を有する人の身体的変化が sāttvika と呼ばれることは明らかにされたが，それでは何故 bhāva なのか？その点を闡明しようと試みたのは，10世紀後半のダナンジャヤとダニカである。

「sāttvika は anubhāva ではあるが，独立した bhāva である。まさに sattva より生ずるからである。そして，それ (sattva) は観客の心を遍充するもの (tad-bhāva-bhāvana) であるから[5]。」

「sattva とは，他者に存する苦しみや喜びなどに参与すること (bhāvanā) において，心がこの上なく気持よい状態になることである。こう言われている。——sattva とは心に生ずるものである。そして，それは心を一つの対象に集中した状態から生ずる (*NŚ*, p. 374)。苦しんでいるもの，あるいは喜んでいるものによつて涙や立毛などが表現されること，それこそ彼に sattva がある〔しるしである〕。その sattva によつて達せられ

るものが sāttvika である。そして tad-bhāva-bhāvana とは bhāva〔の定義〕である[6]。（だから sattva は bhāva である。）それ（sattva）より生ずるものであるから，涙なども bhāva〔として扱われる〕。それはまた bhāva を指示する性質の〔身体的〕変化よりなるから anubhāva でもある[7]。故にそれら（sāttvika）は二面性を持つ。」

この説の場合，sāttvika 自体が bhāva であると言うのではなく，bhāva である sattva から生ずるから bhāva とみなされるとするのである。

バラタは sāmānya-abhinaya の種類として，「語より生ずるもの」，「身振より生ずるもの」，「sattva より生ずるもの」をあげ，そのうちで特に sattva を重視する。この sattva は不明瞭なもの（avyaktarūpa）であるが，立毛や涙など外的な特徴によつて理解される[8]。アビナヴァグプタはその個所に対する註で Śrī Śaṅkuka 説をかなり詳しく紹介するが，sattva については Bhāvâdhyāya で詳論したことを示唆している[9]。遺憾ながら Abhinavabhāratī 第7章の該当個所は現存しないが，ラサ論に関する他の個所の場合と同様に，ヘーマチャンドラによつて踏襲されたと推測される。ヘーマチャンドラ説を検討する前に，ヴィディヤーナータ（14世紀前半）の説と，それに対するクマーラスヴァーミン（15世紀）の注目すべき註釈[10]を調べて，特に後者の論の展開に応じて，ヘーマチャンドラの説をも検討することにする。

「sattva とは，他者に存する楽などに参与すること（bhāvanā）により，心が充たされること（bhāvitântaḥkaraṇatva）である。sattva から生ずるものが sāttvika である。」（*Pratāparudrīya*, IV, p. 159）

それに対するクマーラスヴァーミンの註[11]の要点を述べる。

sattva とは，演出（abhinaya）などを通じて，他者に存する苦楽などに参与することにおいて，心がこの上なく気持よい状態になることである。sattva によつて達せられる bhāva が sāttvika である。Bhāvaprakāśa (p. 14) に次のように述べられている。「他者の苦楽などから生ずる anubhāva によつて〔観客の〕心にこの上なく気持よい状態が生じ，それにより観客の心を遍充すること（tad-bhāva-bhāvana）[12]，この気持よい状態が sattva であり，それによつて達せられるものが sāttvika であると呼ばれる。anubhāva であることは〔ながしめ kaṭākṣa などと〕共通であるが，それらは sattva（bhāva の一種）より生ずるものであるからして別個のものと定義される。そして，それらは硬直（stambha）などであると伝えられる。」ここで，tad-bhāva-bhāvanam とは，tanmayatvenâvasthānam（それと同一なるものとして存すること）である。それ故，曰く。「ラーマなどに存する苦などを

同じ形で（tadātmanā）経験した観客の心の状態（bhāva）が tad-bhāva-bhāvana である」と[13]。そして，このように vibhāva (Sītā etc.) などを見ることにより生ずる愛情（anurāga=rati）や厭世（nirveda）などの感情が，vibhāva などと一体化した（tanmayībhavana-rūpa），sattva という語で表示される，観客の心のこの上なく気持よい状態から生ずる，一般と異なる原因によつて，他の状態に移行する場合，それが stambhha などの bhāva，すなわち sāttvika-bhāva となるのである[14]。そして，それら（sāttvika——内的な状態）は，自らの結果である，だからこそ sāttvika と呼ばれるところの，外的で非精神的で物質的で身体的な stambha（硬直）などの anubhāva によつて指示される。このようにして，実は他ならぬ愛情や厭世などの感情（bhāvā）が，〔それら身体的な変化により〕指示されているのだということに帰結する。それ故，ヘーマチャンドラ先生によつて次のように述べられる。「stambha などは外的で身体的であり anubhāva であるが，それらは内的な〔sāttvika-〕bhāva を理解させ，実は愛情や厭世を指示するものであると決定される」と[15]。このように，sthāyin と saṃcārin（vyabhicārin）とのグループそのものが，生物（人間）の精神状態（manomayâvasthā）に達し，結果と原因の形をとつて，二様に外的と内的な sāttvika の特質をもたらすのである，というのが秘訣である。

ここでクマーラスヴァーミンは sāttvika に関する4つの説をあげる。その第一の説——この恋情（rati）などのグループは，mano-maya（精神的原理）に存するが，それは五元素よりなる anna-maya（粗大な原理）を動揺さす性質の故に，prāṇa-maya（活動原理）が mano-maya と同一化し，「その中に mano-maya が存する〔から sattva である〕」（sīdaty asmin manomayaḥ）という語源解釈により，また善性（sādhuva）であることからして，sattva という語で表示される時，その prāṇa-maya に入り，sāttvika の性質に達する[16]。そして，prāṇa が地の部分で優勢になる時に stambha が生ずる。水の部分で優勢になる時に bāṣpa が生ずる。激しい熱（tejas）の部分で優勢になる時には sveda が生ずる。その反対の場合（激しくない熱の部分で優勢になる時）には vaivarṇya が生ずる。空（ākāśa）の部分で優勢になる時に pralaya が生ずる。風の部分で優勢になる時には，緩い，中位，激しいという三段階に応じて，順次に romāñca, vepathu, vaisvarya (svara-bheda) が生ずる。この第一の説はヘーマチャンドラの説に他ならない[17]。

sīdaty asmin mana（mano-mayaḥ）という語源解釈により，sattva-guṇa が優勢になることから，また善性であるからして，sattva は〔mano-maya と同一化し

た〕prāṇa よりなるものとなる。そこにおいて（tatra「それから」tato?）生ずるものが sāttvika bhāva であるという意である。そして，それら〔mano-maya から〕prāṇa-bhūmi へ移動した rati などの心の動きは，外的で非精神的で物質的な涙などとは異なり，こよなき味覚（carvaṇā）の対象である rati などに対応する vibhāva（ex. 女，庭園）によつて惹起され，また anubhāva（外的，身体的な汗，涙 etc.）によつて指示され，bhāva となるのである。かくて prāṇa が地の部分で優勢になる時に，〔mano-maya から prāṇa-maya へ〕移動した感情のグループは，stambha（=viṣṭabdha-cetanatva）となる。〔prāṇa が〕水の部分で優勢になる時に bāṣpa が生ずる。しかるに熱（tejas）は prāṇa と類似するから，二様に，激しく，あるいは激しくなく prāṇa を優勢にするが故に，二様に sveda と vaivarṇya とが生ずる。〔prāṇa が〕空（ākāśa）において優勢になる時には pralaya（=gatacetanatva）が生ずる。風の自在性においては，それは緩い，中位，激しい〔という段階〕をとるから，三様に romāñca, vepathu, svara-bheda という bhāva によつて存する，とバラタを知る者たち（bharata-vidaḥ）は説く。一方，外的な硬直などは身体的性質のものであり anubhāva である。そしてそれらは内的な sāttvika bhāva を理解させるが，実は rati や nirveda などを理解させるものである。

13 世紀のカシミールの人，シャールンガデーヴァは，その音楽理論書 Saṅgītaratnākara（VII. 1659–1667）[18]において，ヘーマチャンドラ説をふまえ，sāttvika-bhāva の生ずるプロセスを解明しようと試る。以下に彼の説を要約する。——rati などの bhāva により，意識（saṃvid: mano-maya）が変化する時，その変化した意識はそれ自身を生気（prāṇa「活動原理」）に重置する。その prāṇa は身体（deha）を，重置された意識の形をとるものとする[19]。その時，この硬直などの身体的諸変化が生ずる。このように，身体に硬直などの変化が生じた時，味わわれつつある rati などに対応する“要因”（vibhāvaka 女，庭園 etc.）によつて惹起された（vibhāvita），また身体的な硬直などによつて指示される（anubhāvita）内的な諸状態（antare bhāvāḥ）が，そこに意識が重置されるところの prāṇa において顕われる。それらが sāttvika bhāva である。すなわち，sattva と呼ばれる prāṇa において顕われるから sāttvika bhāva と呼ばれるのである。

以下に，ヘーマチャンドラ説，クマーラスヴァーミンの紹介する第一説，シャールンガデーヴァ説をまとめる。

1. rati などの bhāva は mano-maya（saṃvid）に存する。2. それは anna-maya を動揺させる。（saṃvid を変化さす。）3. mano-maya は prāṇa-maya と同

一化する。4. mano-maya は sattva-guṇa であるから，その時 prāṇa-maya も sattva と呼ばれる。5. Śārṅgadeva によれば，prāṇa は deha (: anna-maya) を重置された意識の形をとるものにする。すなわち身体が自己 (ātman) の認識を生み出す。その時，硬直などの身体的諸変化が生ずる。6. rati etc. のグループは prāṇa-maya に入り，sāttvika-bhāva となる。rati etc. に対応する vibhāva (ex. 女，庭園など) によつて惹起され，また anubhāva (身体的な硬直 etc.) によつて指示される bhāva である。7. 外的な硬直などは身体的な性質のものであり，anubhāva である。それは内的な sāttvika-bhāva (prāṇa-maya に存する) を理解させるが，実は rati etc. (mano-maya に存する) を理解させるものに他ならない。8. prāṇa が地の部分で優勢になる時，mano-maya から prāṇa-maya へ移行した bhāva のグループは stambha となる。水の部分では，bāṣpa となる。激しい熱の部分では，sveda となり，激しくない熱の部分では vaivarṇya となる。空の部分では，pralaya となる。風の部分では，緩い，中位，激しいという段階に応じて，romāñca, vepathu, vaisvarya (svara-bheda) となる。要するに，mano-maya に存する rati etc. の諸 bhāva のグループが prāṇa-maya に移行したものが sāttvika-bhāva であるというのであるが，それが役者に属するのか，あるいは観客に属するのか，というような問題は明瞭でなく，一般人において sāttvika が生ずる「科学的」なプロセスを説明しようと試みたようである[20]。

---

1) *NŚ*, VI. 22; VII. 94 (GOS. Vol. I, pp. 268, 375).

2) *NŚ*, pp. 374–375.

3) Ghosh の読み utpadyate をとる。GOS: ucyate.

4) 世間 (loka) において人は悲しければ涙を流す。劇中人物の場合も同様である。だが，演劇 (nāṭya) においては，役者が涙を流すには，心を集中してそれを sattva の状態にしなければならない。だから涙などは sāttvika と呼ばれる。Bharata が問題とするのは役者の表現力である。

5) *DR*, IV. 4^{b}–5^{a}. cf. *Laghu-ṭīkā*: tadbhāvasya=sāmājikacetaso bhāvanaṃ=vāsanam.

6) cf. *DR*, IV. 4^{ab}: sukhaduḥkhādibhir bhāvair bhāvas tad-bhāva-bhāvanam. なお，この IV. 4^{b}–5^{a} に対する *Avaloka* 註で，tad-bhāva-bhāvanaṃ ca bhāvaḥ という読みは NSP. ed. にはない。しかし，Venkatacharya は，*Laghu* 註の pratīka によつてこれを補い，次のように理解する。*DR* によれば sattva=tad-bhāva-bhāvana である。そして tad-bhāva-bhāvana は bhāva の定義であるから sattva は bhāva である。そこで sattva より生ずる sāttvika も bhāva として扱われる (n. 173)。

7) bhāvasaṃsūcanātmakavikārarūpatvāc ca. cf. *DR*, IV. 3^{ab}: anubhāvo vikāras tu bhāvasaṃsūcanātmakaḥ (anubhāva の定義)。

8) *NŚ*, XXII. 1–3 (GOS. Vol. III, p. 146, 149, 150)。

9) *Abh*, pp. 152–153.

10) Kumārasvāmin の rasa 論については，拙稿「プラターパルドリーヤのラサ章」（『国学院雑誌』81–1）を見よ。

11) *Ratnāpaṇa*, pp. 159–160.

12) Dhanika の解釈（注6参照）に従う。Kumāras. の解釈では多少ニュアンスが異なる（次注参照）。なお，この引用個所については，*BhP*（GOS）の読みを採用。

13) cf. *BhP*, p. 13: rāmādyāśrayaduḥkhāder anubhūtes tadātmatā, sāmājikasya manaso yā sa bhāva iti smṛtaḥ. しかしこれは bhāva の定義である。Kumāras. の解釈は Dhanika 等と微妙に異なる。

14) つまり，vibhāva（Sītā etc.）などを見て観客に愛情などの感情が生ずるはずである。しかし，観客の心は vibhāva（Rāma etc.）などの心と一体化してこの上なく気持よくなつている。つまり sattva の状態になつている。この sattva という一般と異なる原因によつて，愛情などは他の状態に移行して stambha 等となる。この状態が sāttvika-bhāva（内的なもの）である。この説の場合，sattva あるいは sāttvika は観客に属する。

15) *Alaṃkāracūḍāmaṇi* ad *KAnu*, II. 53（p. 147）.

16) つまり，mano-maya に存する rati などのグループが五元素よりなる anna-maya を動揺さす時，prāṇa-maya は mano-maya と同一化し，純粋な sattva-guṇa に支配されて，sattva という語で呼ばれる。その時，mano-maya にあつた rati などのグループは prāṇa-maya に入り，sāttvika-bhāva となる。anna-maya などの分類は *Taittirīya-upaniṣad*, II. 8 に見られるが，後代の vedānta 学派で問題とされる。cf. *Vedāntasāra*, 90, 107, 110, 111 etc. 中村元博士は，anna-maya-kośa（食よりなる蓋被），prāṇa-maya-kośa（生気よりなる蓋被），mano-maya-kośa（意よりなる蓋被），vijñāna-maya-kośa（識よりなる蓋被），ānanda-maya-kośa（歓喜よりなる蓋被）と訳される。前田専学『ヴェーダーンタの哲学』（平楽寺），p. 120 をも参照せよ。

17) 以下，*Alaṃkāracūḍāmaṇi*, pp. 144–147.

18) ĀSS. 35, pp. 852–853.

19) ātmānaṃ tanoti=adhyastasaṃvidākāraṃ karoti. すなわち「身体が自己（アートマン）の認識を生み出す」（deha ātma-buddhiṃ janayati）という意。

20) Kumārasvāmin のあげる第2～4説については略す。また，*Sāṃkhya-kārikā*, II. 13 の sattva の定義を念頭に置いた Sāgaranandin, *Nāṭakalakṣaṇaratnakośa*, p. 203（ed. Chowkhamba, 1972）の説，及び Viśvanātha の *Sāhityadarpaṇa*, III. 134[b]–135[a] の説も割愛する。Rūpagosvāmin, *Haribhaktirasāmṛtasindhu* における独特の sāttvika-bhāva 論については，H. R. Mishra, *Theory of Rasa in Sanskrit Drama*（Chhatappur, 1964）pp. 423–425 を見よ。

（国学院大学助教授）